Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

大学生の「感動」に影響を及ぼす要因に関する質的・量的研究

楠本，恭子
長ヶ原，誠

(Citation)
神戸大学発達科学部研究紀要,11(2):279-288

(Issue Date)
2004-02

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81000575

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000575

KOBE UNIVERSITY

神戸大学発達科学部研究紀要
第11巻第2号　2004

大学生の「感動」に影響を及ぼす要因に関する質的・量的研究

楠本　恭子*　長ヶ原　誠**

The qualitative and quantitative study on factors influencing emotional touchment of university students

Kyoko KUSUMOTO　　Makoto CHOGAHARA

1．はじめに

現代の子どもは疲れ気味で無気力な傾向があると言われている。「神戸市における青少年・保護者の意識と行動調査」（平成14年7月）によると、「あなたは、先月（6月）1ヶ月間に次のようなことがどれくらいありましたか」という質問で「疲れやすい」の項目に「よくあった」と回答した者は、小学5年生で27.4%、中学2年生で40.8%、17歳で38.1%であった。「何もやる気がしない」の項目では小学校5年生で13.6%、中学2年生で27.7%、17歳で26.5%が「よくあった」と答えている。「平成10年度横浜市青少年基本調査報告書」（平成11年3月）においては、からだや気持ちのことについて「ふだん次のようなことがよくありますか（複数回答可）」の問いに「疲れやすい」ことが「よくある」と回答した者が、小学4～6年生で49.8%、中学1～3年生で61.1%、高校1～3年生で69.1%もいる。これらの統計から、現代の子どもに疲れ気味で無気力な傾向があることが分かる。

こういった現状をふまえ、「第4次神戸市青少年育成中期計画効果の検証検討委員会報告書（案）」において、「子どもの感動体験を増やす」ことが重点目標のスローガンの一つとしてあげられている。「神戸市における青少年・保護者の意識と行動調査」によれば、「過去半年間の生活のなかで、感動したことがありますか」の問いに「ある」と回答した者は、小学5年生で30.5%、中学2年生で33.8%、17歳で53.7%であった。これらの数値をそれぞれ、35%、40%、60%にまで引き上げようと言うのだ。そのための指針として挙げられているのが、「子どもにいろいろな体験をさせる（保護者に対して）」「いろいろなスポーツや外遊びにチャレンジする（子どもに対して）」「子どもたちの体験学習の機会を増やす（学校に対して）」である。ちなみに、横浜市青少年問題協議会の「青少年の心のより所と居場所－中・高生とその保護者に対する意識調査－」（平成14年3月）においては「最近とても感動したことはありますか」の問いに「ある」と回答した割合は中学3年生38.8%、高校2年生40.2%であった。

感動のある日々を送っている子どもは3割～5割というのが平均的な見方のようだ。これはすなわち感動のない日々を送っている子どもが5割以上いるということを意味し、子ども時代の経験が心の成長にとって非常に重要な役割を果たすことを考えれば、憂慮すべき事態であるといえる。感動体験

* 神戸大学発達科学部　卒業
**神戸大学発達科学部

(2003年10月31日　受付
2003年12月11日　受理)

を増やす試みにとりかかることが、今、必要とされているのだ。

しかしながら、感動体験を増やす試みとは具体的にどのようなものであろうか。いろいろな体験をすれば確かに感動する確率は高くなるかもしれない。だが、それだけで十分とは言い難い。感動体験を増やしたいのであれば、まず感動とはどういった現象であるのか具体的に研究し、感動のメカニズムをある程度把握する必要があるのではないだろうか。かつて「人は楽しいときにどのように感じているのか、そしてそれはなぜなのか」といった根源的な疑問から楽しさの研究が始まり、その結果フロー理論が確立され（Csikszentmihalyi, 2000）、そのモデルは人々が日常生活をより楽しいものにするのに役立っている。これと同じことが感動にも必要だと考えられる。つまり、「人はどのように感動しているのか、なぜ感動するのか」といった観点から研究を進めることが、人々の感動体験を増やすことにつながっていくのだ。

子どもの教育の分野において、感動体験をテーマに進められた研究としては次のようなものが例として挙げられる。生活科の授業を中心とした事例に注目した感動体験に関する実践研究（福岡教育大学教育学部附属福岡小学校　1988）や、国語や算数、生活科の授業、ボランティア活動、発表会といった学校生活の様々な局面それぞれに注目した自己実現をさせる感動体験の組織化に関する研究（中京女子大学子ども文化研究所　2001）などである。これらの研究においては、感動体験は次のように位置付けられている。

感動体験は、「体験」が「価値ある体験」へと高められていく過程や、高められた結果として、子どもが、自分自身の生活（単なる見方・考え方だけにとどまらず行い方までも含めて）を変える原動力になると考えるものである（福岡教育大学教育学部附属福岡小学校　1988）。

貴重な成功体験を、子どもたちがさらに自分の胸に深く刻むためには、活動を精選し、そこで働く国語の力を定着しなければならない。つまり、価値的感動と活動と技能・能力を組織化することである。（中略）体験を話題にすることで、子どもたちの学習への意欲は高まる。それが感動体験ならば、学習に深みと厚みを与えてくれる（中京女子大学子ども文化研究所　2001）。

しかしながら、「人はどのように感動しているのか、なぜ感動するのか」といった根本的な問いに焦点をあてた研究は未だなされていないのが現状である。また、子ども時代の感動経験の違いがその後どの様な影響を与えるのかという問題もある。

近年モラトリアムという言葉が頻繁に聞かれるように、大学生は、子どもではないが、大人として感性や価値観が確立されたとは言い難い存在である。時間的な余裕を背景に、勉学に励む者、アルバイトに励む者、余暇活動に励む者など、それぞれがその時々の自分の価値判断に従って行動している。彼らは小・中・高という子ども時代を通してどのような感動経験を積み、現在に至ったのか。大学生の最近の感動状況と、子ども時代から現在に至るまでの感動経験の両方を調査し比較することで感動経験の違いが与える影響について探ることが可能である。

以上に述べてきたように、感動体験を増やすためには感動のメカニズムを把握していくことが必要であるが、そういった研究はほとんどなされていないのが現状である。また、大学生を対象とした感動経験に関する調査も行われていない。そのため、本研究では対象者を大学生として感動経験に関しての調査を行った。

本研究の目的は、大学生の感動経験に注目し、大学生に感動を生じさせる要因となったものは何であったのかについて探求することである。

2．研究の枠組と方法

（1）研究枠組

本研究では大学生を対象に質問紙調査を実施し、感動経験と感動を呼び起こす要因（以後、感動生起要因とする）について分析しているが、その前段階として感動についてのイメージ調査も行った。感動についてのイメージ調査結果から感動に関するキーワードを抽出し、それらを質問紙作成時に参考とした。

イメージ調査結果概要

調査時期

2001年５月29日～６月５日。

調査対象者

大学生・大学院生・2001年度に大学を卒業した者（男女計７人）。

調査方法

質問紙を用いた直接面接法。ただし、直接会うことが困難な場合はメールにて質問・回答のやり取りを行った。

調査内容

「感動」という言葉を聞いて頭に思い浮かぶ単語および文章（複数回答）。

調査結果

回答結果をＫＪ法により似た内容の言葉及び文章のグループに分け、それぞれのグループから推測される感動の性質をまとめた。詳細な結果については表１に記した。その結果、感動が生じる際のキーワードとして「経験」「感受性」「価値」「対人関係」「芸術作品の鑑賞」が浮かび上がってきた。

表１．感動に関するイメージ調査結果

感動の性質	回答例
感動を引き起こすきっかけとなる刺激（経験）とその刺激を受け止める心（感受性）が必要である	・心と体で感じる体験
	・感じる心、ジーンとくる
	・後から思い起こせるものが感動した体験なのではないかと思う
人に良い影響をもたらす	・人の心や人生を豊かにする
	・自分の成長に不可欠なもの
「感動」という言葉は人に前向きでポジティブなイメージを抱かせる	・感動はたくさんした方がいい
	・ときめき、キラキラ
「深い感動」と「浅い感動」の２種類がある	・大きなものと小さなものがある
新しい価値の発見や既存の価値の再認識が関係している	・非日常に多くあるもの
	・日常の中にあるもの
	・新しい発見、新しい価値観に出会ったとき感じる
	・奇跡
	・旅、海外の生活（今の生活とは違う生活。全てに敏感になる気がする）
	・きれいな景色を見たとき、美しいものを見たとき
	・夕陽、海、山、大自然
幸せや楽しさ、喜びといったポジティブな感情が関係している	・幸せなときに感じる
	・久しぶりに楽しいことをしたとき
	・喜び
共感・感情移入によってもたらされる場合がある	・一人で感じることもあるし他者と共に感じることもある
	・共感
芸術作品によってもたらされる場合がある	・映画、本、写真、ドラマ
良好な人間関係によってもたらされる場合がある	・優しさ、人を思いやる気持ち
	・人の絆、仲間
	・憧れの人に会えたとき
	・人に感謝されたとき
	・友達の励まし
心地よさによってもたらされる場合がある	・おいしいものを食べたとき
何かに打ち込むことや何かを達成すること、またその結果得られる満足や自信によってもたらされる場合がある	・何か目標を達成したとき、試合で勝ったとき
	・人に認められたとき
	・熱中、専心、努力
	・オリンピック、スポーツ、汗、部活、人のがんばる姿
	・満足、自信
メッセージを受け取ることでもたらされる場合がある	・直接言われた言葉は心に残る。それがその後の人生の支えになることもある
	・手紙（久しぶりの友達から手紙をもらって）

また、感動の性質をまとめる際に以下の先行研究の内容も参考とした。

・一つの経験が単に快いだけのものではなく楽しいものであるかどうかを決定するのは、個人の目標や能力、外部状況に対する主体的評価などの複雑な相互作用である　(Csikszentmihalyi, 2000)
・あらゆる活動はそれが目新しいやり方、または何かに挑戦するようなやり方で感覚的身体的潜勢力を用いるものであるならば、報いある活動として経験される(Murphy, 1947)
・ある刺激―ひいてはある活動―が楽しいものであるためには、それが新奇さを含まねばならない(Hebb, 1955) (Berlyne, 1960)
・自己目的的活動経験が含む５つの因子は「友情とくつろぎ」「危険と運」「問題解決」「競争」「創造」である　(Csikszentmihalyi, 2000)
・フローには「deep flow（深いフロー)」と「microflow（小さなフロー)」がある　(Csikszentmihalyi, 2000)

本研究全体のプロセス

質問紙において、大学生の感動経験を尋ねると共に、過去半年間に感動した頻度（以下、感動頻度と言う）を従属変数、感動に深く関わっていると思われる「余暇活動」「対人関係」「物事の考え方」の３分野からそれぞれ独立変数を設定した。詳細な質問紙の内容については表２に記した。先に述べた３分野と感動に関するイメージ調査で得られた５つのキーワードは次のように対応している。

・「余暇活動」→「経験」「芸術作品の鑑賞」
・「対人関係」→「対人関係」
・「物事の考え方」→「感受性」「価値」

本研究では、質問紙調査によって大学生の感動経験の現状を明らかにすると共に、感動頻度の高い人と低い人とでどのような点においてどのような差があるのかを明らかにし、その結果を基に感動生起要因について探求していくものとする。また、本研究の全体的なプロセスを図式化すると図１のようになる。

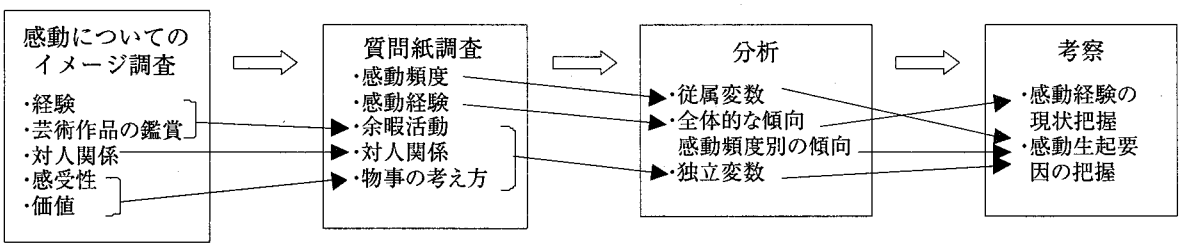


図１．研究の流れ

（２）研究方法

調査時期

2001年９月12・13日。

調査対象者

K大学の学生98人。

調査方法

質問紙を用いた集合調査をK大学にて実施した。大学１回生を対象とした一般教養科目の出席者（３クラス）に回答を求めた。平均回答時間は15分で、回収率は100％であった。縁故による有意抽出法を用いているので統計的一般化には限界がある。そのことをふまえ、今回の調査結果の解釈は、大学生の感動経験・感動生起要因を追求する上での１つの参考資料として位置づけるものとする。

調査内容

質問紙の詳しい内容については表2に記した。社会・他者への心構えを調べる手段として本研究では心理尺度を使用したが、その内容は次の通りである。

表2．質問紙内容

質問項目			内容
個人属性			性別・年齢・学年・専攻分野（文系or理系）
感動頻度（＝過去半年間に感動した頻度）			1.全くない 2.あまりない 3.少しはある 4.十分にある
感動経験	最近の感動経験		「最後に感動した時期」または「過去半年間に感動した事柄」についての自由記述
	現在までの感動経験	最も深く感動した場面	9選択肢（※）の中から該当する1つを選択
		感動した回数が最も多かった場面	
		感動した回数が最も少なかった場面	
余暇活動	定期的なクラブ・サークル・ボランティア活動		1.している 2.していない
	定期的なバイト		
	定期的な個人の習い事		
	不定期的なイベント・ボランティア活動の参加機会		1.全くない 2.あまりない 3.少しはある 4.十分にある
	芸術作品の鑑賞機会		
	旅行・行楽の機会		
	情報収集態度		3選択肢の中から該当する1つを選択
対人関係	交流関係の広狭		1 4選択肢の中から該当する全てを選択
	対人関係への満足度		1.全く満足していない 2.どちらかというと満足していない 3.どちらかというと満足している 4.十分満足している
	理想的対人関係		4つの選択肢の中から該当する1つを選択
物事の考え方	社会への興味度		1.全くない 2.あまりない 3.少しはある 4.十分にある
	人生への満足度		1.全く満足していない 2.どちらかというと満足していない 3.どちらかというと満足している 4.十分満足している
	人生観		9選択肢の中から該当する1つを選択
	社会・他者への心構え	達成動機測定尺度	堀野・森（1991）
		認知的熟慮性－衝動性尺度	滝聞・坂元（1991）
		ユニークさ尺度	宮下（1991）
		生き方尺度	板津（1992）

※1.芸術作品（絵画・映画・小説・音楽など。ドキュメンタリー作品も含む）を鑑賞したとき 2.大自然や風景の美しさを満喫したとき 3.新しい体験・発見をしたとき 4.心地よい体験をしたとき 5.自分自身に人間関係でよいことがあったとき 6.他人に人間関係でよいことがあったとき 7.自分自身が頑張った（結果が良かった場合も良くなかった場合も共に含む）とき 8.他人が頑張っている姿を見た（結果が良かった場合も良くなかった場合も共に含む。実際に見た場合もメディアを通して知った場合も共に含む）とき 9.その他（自由記述）

達成動機測定尺度

2つの下位尺度「自己充実的達成動機」「競争的達成動機」で構成される。

認知的熟慮性一衝動性尺度

ある判断をする際により多くの情報を集めてじっくり考えるか、ある程度の情報で早急に結論を出すか、どちらの傾向が強いか調べる尺度。

ユニークさ尺度

「他者の存在を気にするか否か」「自己を積極的に表出するか否か」の2つの視点から独自性欲求を「我が道型」「自己中心型」「抑圧型」「自己顕示型」の4類型に分類している。

生き方尺度

5つの下位尺度「能動的実践的態度」「自己の創造・開発」「自他共存」「こだわりのなさ・執着心のなさ」「他者尊重」で構成される。「自己の創造・開発」とは、自己の成長・可能性の開発への積極的な姿勢と、それを支える自己への柔軟性を有することを意味する因子である。また、「自他共存」とは、自他それぞれが主体であり、それぞれの独自性を認め合い、協力し合うことを意味する因子である。

3．結果と考察

（1）回答者の個人属性および感動頻度によるグループ分け

回答者の個人属性の内訳を表3に記した。回答者の68.4%が女性で、90.8%が文系学生であった。当初は男女別、専攻分野別の分析も行う予定であったが、あまりにもサンプル数に差があるので今回は分析を見送ることにした。

表３．回答者の個人属性

	性別		専攻分野		年齢			
	女性	男性	文系	理系	18歳	19歳	20歳	その他
該当者(%)	68.4	31.6	90.8	9.2	28.6	48.0	18.4	5.1

回答者の感動頻度の分布状況は表４に記した。感動頻度低群が全体の9.2%しかおらず、９割の回答者が感動のある生活を送っていることがわかる。しかし、回答者の大半が大学１回生であり、半年前に大学合格という大きな成功体験をしていることが調査結果に大きな影響を及ぼしている可能性がある。

表４．感動頻度によるグループ分け

	感動頻度低群		感動頻度中群	感動頻度高群
	全くない	あまりない	少しはある	十分にある
該当者(%)	1.0	8.2	42.9	48.0

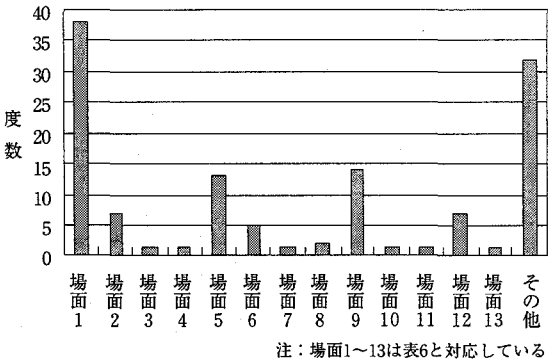
当初は、クロス集計を行う際、感動頻度低・中・高群の３群比較から分析を行う予定であったが、サンプル数に極度の偏りがあるため、今回は主に感動頻度中・高群の２群の差に注目して分析を行った。

（２）回答者の感動経験

全体的な感動傾向

イメージ調査結果を参考に、質問紙では過去半年間の感動経験を自由記述で、現在までの感動経験を９選択肢群（表２参照）を用いて調査した。過去半年間の感動経験についての自由記述や９番目の選択肢「その他」で得られた自由記述内容をイメージ調査結果と併せてＫＪ法で分析し、感動の要素（表５）を抽出した。感動が含む要素は外面的要素と内面的要素に大別できるが、内面的要素は外面的要素による刺激から連鎖反応的に人の心の中に生じるものであり、単独では生じないと考えられる。そこで、外面的要素を基準として主な感動場面を自分自身の経験で感動する場合と他者の経験で感動する場合とに大別し、さらに１３場面に分類した（表６）。

過去半年間の感動経験に関する自由記述をＫＪ法で表６の13場面に分類した結果、回答者が過去半年間に経験した感動場面として最も多くの人が挙げたのが「芸術作品を鑑賞する場面」であった。２番目に多くの人が挙げたのが「自分自身ががんばる場面」、３番目は「自分自身に人間関係でよいことがある場面」であった（図２）。ただし、過去半年間に感動した場面についての自由記述は複数回答可とし、延べ人数は124人であった。



注：場面1～13は表6と対応している

図２．回答者の過去半年間の感動状況

表５．感動の要素

外面的要素	内面的要素
A)人間関係でよいことがある	M)幸せである
B)他者からメッセージを受け取る	N)楽しい
C)他者との一体感を得る	O)共感･感情移入する
D)他者に自分の気持ちが伝わる	P)他者の意見･価値観に共鳴する
E)他者同士が一体となる	Q)他者と感情を共有する
F)何かに打ち込んでいる	R)満足できる
G)何かを達成する	S)自信がつく
H)心地よい体験をする	T)喜ばしい
I)美しい自然を認識する	U)賞賛する
J)芸術作品を鑑賞する	V)価値を認識する
K)他者やその他の対象物の優秀性を認識する	
L)新しい体験をする	

表6．主な感動場面

	感動する場面	場面に含まれる要素
自分自身の経験で感動する場合	芸術作品を鑑賞する場面(場面1)	J)N)O)T)U)V)
	大自然や風景の美しさを満喫する場面(場面2)	I)O)U)V)
	新しい体験・発見をする場面(場面3)	L)N)R)S)T)U)V)
	心地よい体験をする場面(場面4)	H)M)R)T)V)
	自分自身に人間関係でよいことがある場面(場面5)	A)M)N)R)T)V)
	他者からメッセージを受け取る場面(場面6)	B)O)P)Q)S)T)U)V)
	他者に自分の気持ちを伝える場面(場面7)	D)M)R)T)V)
	他者との一体感を得る場面(場面8)	C)M)N)Q)T)V)
	自分自身が頑張る場面(場面9)	F)G)N)R)S)T)U)V)
他者の経験で感動する場合	他者に人間関係でよいことがある場面(場面10)	A)O)Q)R)T)U)V)
	他者同士が一体となる姿を見る場面(場面11)	E)O)Q)R)T)U)V)
	他者が頑張る姿を見る場面(場面12)	F)G)O)Q)R)T)U)V)
	他者やその他の対象物の優秀性を認識する場面(場面13)	K)U)V)

注:A)～V)は表5と対応している

感動頻度別傾向

現在までの感動経験についての回答結果を感動頻度別にクロス集計した。その結果、感動頻度の高い人ほど「自分自身に人間関係でよいことがある場面」の経験が豊富である傾向が確認された（表7）。

表7．感動頻度別「自分自身に人間関係でよいことがある場面（場面5）」の経験の差

	場面5において最も深く感動した	場面5において感動した回数が最も多い	場面5において感動した回数が最も少ない
感動頻度低群	0.0	0.0	16.7
感動頻度中群	31.8	40.0	50.0
感動頻度高群	68.2	60.0	33.3
合計	100.0	100.0	100.0

単位:%

（3）余暇活動

過去半年間の情報収集態度と感動頻度でクロス集計を行った。その結果、感動頻度の高い人ほど積極的に情報収集を行っていると思われた（表8）。また、その他の余暇活動の分野の独立変数と感動頻度とで相関分析を行った。その結果、感動頻度の高い人ほど、定期的なクラブ・サークル・ボランティア、不定期的なイベント・ボランティアに参加する機会や芸術作品を鑑賞する機会、旅行・行楽に出かける機会が多い傾向が確認された（本章末尾、表11参照）。

表8．感動頻度別情報収集態度の差

	自分が興味ある分野について積極的に狭く深く情報収集する	興味のあるなしに関わらず様々な分野について積極的に広く浅く情報収集する	情報収集にはあまり積極的でない
感動頻度低群	8.7	7.4	12.7
感動頻度中群	39.1	33.3	60.0
感動頻度高群	52.2	59.3	28.0
合計	100.0	100.0	100.0

単位:%

（4）対人関係

分析の結果、現在の交流関係の広狭は感動頻度とは関係がないことが確認された。理想的対人関係と感動頻度とでクロス集計を行った結果、対象範囲の広狭に関わらず、深い付き合いを理想とする人

ほど感動頻度が高いと思われた（表９）。また、現在の対人関係に対する満足度と感動頻度とで相関分析を行った結果、現在の自分の対人関係に対する満足度の高い人ほど感動頻度が高い傾向にあることも確認された（本章末尾、表11参照）。

表９．感度頻度別理想的対人関係の差

	狭く浅い付き合い	広く浅い付き合い	狭く深い付き合い	広く深い付き合い
感動頻度低群	33.3	9.1	6.7	10.3
感動頻度中群	66.7	63.6	42.2	35.9
感動頻度高群	0.0	27.3	51.1	53.8
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

単位:%

（５）物事の考え方

分析の結果、社会への興味をどの程度持っているか、人生への満足度はどの程度か、どのような人生観を持っているか、ということは感動頻度とは関係がないことが確認された。社会・他者への心構えと感動頻度とで相関分析を行った結果、感動頻度の高い人ほど次のような傾向が見られた（本章末尾、表11参照）。

・自己充実的達成動機が高い（＝自分自身を高めたり深めたりするために努力する傾向が強い）傾向がある。
・自己の成長・可能性の開発への積極的な姿勢と、それを支える自己への柔軟性を有する傾向がある。
・個としての自己の行為は責任を持ってやり遂げる一方で人間一人の力の限界を自覚しているために他者を尊重し周囲と調和的・協力的でありたいと願う傾向がある。

感動頻度の低い人に見られた傾向は次の通りである（表10）。

・わが道型の独自性欲求の人（＝他者の存在を気にせず自己を積極的に表出しない人）が多い。

表10．感動頻度別独自性タイプの差

	我が道型の独自性欲求	抑圧型の独自性欲求	自己顕示型の独自性欲求	自己中心型の独自性欲求
感動頻度低群	11.8	7.7	0.0	10.3
感動頻度中群	55.9	34.6	44.4	34.5
感動頻度高群	32.4	57.7	55.6	55.2
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

単位:%

表11．感動頻度との相関係数

	余暇活動				対人関係	物事の考え方		
	旅行・行楽に出かける機会	芸術作品を鑑賞する機会	定期的なクラブ・サークル・ボランティア	不定期的なイベント・ボランティア	現在の自分の対人関係への満足度	自己充実的達成動機	自己の創造・開発	自他共存
感動頻度	.369**	.349**	.269**	.222*	.249*	.305**	.217*	.206*

*p<.05　**p<.01

４．結論

（１）結果のまとめと議論

本研究では次のような結果が確認された。

①大多数の大学生が過去半年間に何らかの感動経験をしている。その主な感動場面は「芸術作品を鑑賞する場面」「自分自身ががんばる場面」「自分自身に人間関係でよいことがある場面」であった。
②感動頻度の高い人ほど「自分自身に人間関係でよいことがある場面」で感動した経験が豊富であった。
③感動頻度の高い人に見られる傾向は以下の通りである。
1）情報収集に積極的である。
2）クラブ・サークル・ボランティア・イベント活動に参加する機会や芸術作品を鑑賞する機会、旅行・行楽に出かける機会が多い。
3）深い付き合いを理想とし、現在の自分の対人関係に対する満足度も高い。
4）自分を高めたり深めたりするために努力をする。
5）自己の成長・可能性の開発への積極的な姿勢と、それを支える自己への柔軟性を有している。
6）個としての自己の行為は責任を持ってやり遂げる一方で人間一人の力の限界を自覚しているために他者を尊重し周囲と調和的・協力的でありたいと願う。
④感動頻度の低い人に見られる傾向は以下の通りである。
1）他者の存在を気にせず自己を積極的に表出しない。

以上の結果をふまえれば、感動生起要因として次の4つが考えられる。

Ⅰ．様々な経験とそれらが持つ価値を認識する力
Ⅱ．自己を充実させるための努力とポジティブな生きる姿勢
Ⅲ．良好で深い人間関係
Ⅳ．他者に対する関心と尊重

上記のⅠとⅡの項目は主に意識の方向に関するものである。Ⅰでは「様々な経験」という言葉があるが、経験というものは自分の外部で起きた事柄をどのように認識するかで良くも悪くもなるものである。だからこそ、経験が持つ価値を認識する力が必要なのである。ⅢとⅣは主に他者との関係に関するものである。良好で深い人間関係を築くためには他者に関心を払い、他者を尊重する必要があり、また他者への関心や尊重というものは良好な人間関係で育まれていくと考えられる。よって、ⅢとⅣには密接な相互作用があるとも言える。

以上のことは次の先行研究（すべて、Csikszentmihalyi, 1996）とも共通する部分がある。

・最良の瞬間は普通、困難ではあるが価値のある何かを達成しようとする自発的努力の過程で生じる。
・外部のことがらは知覚されない限り自分にとっては存在しないのだから、意識は主観的に経験された現実と対応する。
・他者と交際するかしないかは、体験の質に大きな差を生む。他者は生活を非常に楽しく実りあるものにすることもあるし、全く惨めなものにすることもあるので、他者との関係をどのように取り扱うかは、我々の生活の質に大きな違いをもたらす。

以上の4つの感動生起要因を意識しながら毎日の生活を送るだけで、感動頻度が上がる可能性がある。なぜならば、意識の内容や目標の構造の総和である自己が注意を形作り、何に注意するかによって記憶・思考・感情が形作られ、経験の質を向上させることにつながるからである。そしてまた、さまざまなことがらに注意した結果から意識の内容や目標の構造、すなわち自己が形作られる。そういった注意と自己の循環的因果関係が人間にはある(Csikszentmihalyi, 1996)のである。

（2）今後の課題

本研究では回答者の個人属性に大きな偏りが確認された。よって、今後は偏りのないサンプルでの調査が必須である。今回はサンプル数が不足していたため深い分析を行わなかったが、感動頻度と性

別・専攻分野の相関係数（感動頻度との相関係数：性別［女性＝1、男性＝2］…-.217*／専攻分野［文系＝1、理系＝2］…-.229*　*p<.05）をふまえれば、女性と男性、文系学生と理系学生の比較検討も必要であると思われる。そして、フローや喜び、楽しさ、充実感、価値観、動機づけなど、感動との関わりが深いと思われる分野の先行研究を参考に、本研究で確認された感動生起要因も併せて検討し、感動に関するより深い調査と感動が生起する過程についての分析を進めることが重要である。

引用・参考文献

第4次神戸市青少年育成中期計画効果の検証検討委員会(2003)．第4次神戸市青少年育成中期計画効果の検証検討委員会報告書（案）。

Csikszentmihalyi, Mihaly(1975)．*Beyond Boredom And Anxiety: Experiencing Flow In Work And Play,* Jossey-Bass Inc.（今村浩明訳(2000)『楽しみの社会学』新思索社、26,33,50-55)。

Csikszentmihalyi, Mihaly(1990). *Flow:The Psychology of Optimal Experience,* Harpercollins.（今村浩明(1996)訳『フロー体験　喜びの現象学』世界思想社、4,34,42-44,205)。

中京女子大学子ども文化研究所(2001)．『自己実現をさせる感動体験の組織化』明治図書、26-27。

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校(1988)．『感動体験を中核とした「生活科」の授業づくり』明治図書、16-17。

掘　洋道・山本真理子・松井　豊（編）(1994)．『心理尺度ファイル　人間と社会を測る』垣内出版、172-175。

堀　洋道監修・山本真理子編(2001)．『心理測定尺度集Ⅰ　人間の内面を探る＜自己・個人内過程＞』サイエンス社、195-198。

堀　洋道監修・吉田富二雄編(2001)．『心理測定尺度集Ⅱ　人間と社会のつながりをとらえる＜対人関係・価値観＞』サイエンス社、68-71,417-421。

堀野　緑(1987)．「達成動機の構成因子の分析－達成動機の概念の再検討－」『教育心理学研究』35巻、148-154。

堀野　緑・森　和代(1991)．「抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因」『教育心理学研究』39巻、308-315。

滝聞一嘉・坂本　章(1991)．「認知的熟慮性－衝動性尺度の作成－信頼性と妥当性の検討」『日本グループダイナミクス学会第39回大会発表論文集』、39-40。

宮下一博(1991)．「大学生の独自性欲求の類型化に関する研究」『教育心理学研究』39巻2号、214-218。

板津裕巳(1992)．「生き方の研究－尺度構成と自己態度との関わりについて－」『カウンセリング研究』25巻、85-93。